

比較表現に係る場面・文脈・状況の把握と英語教育 ： 文法上の誤用からの示唆

著者	高橋 玄一郎
雑誌名	鹿児島大学総合教育機構紀要
巻	2
ページ	53-66
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030675

比較表現に係る場面・文脈・状況の把握と英語教育 —文法上の誤用からの示唆—

高橋 玄一郎

キーワード：比較表現、場面・文脈・状況、英語教育、文法上の誤り、プラグマティックス

はじめに

英語の文法に関する誤用の考察を手掛かりとして、英語力向上をめざす英語の学習者がつまづきやすい点を確認できれば、それを何らかの形で指導上に活かす方法が模索できる。考察の対象が英語の文法であるのは、それが英語の理解と表現の両面で、語彙とともに必要な道具であり、学習上も避けて通ることのできない代物だからである。また、中学、高等学校の英語教育にて扱われてきた教育・学習事項を土台としながらも、それをよりよく理解、応用していくために、現況を点検して改善点に分かれれば、さらに少しずつでも補完、整理すべき事柄もあるように思われる。

本稿では、英語外部試験の文法問題とそれを受検した学生の誤用を足がかりとして、年齢表現に係る英語形容詞 *old* の用法といわゆる比較表現、たとえば、比較級構文 *X -er than Y* ならびに原級比較文（あるいは同等比較文）と呼ばれる *X as ... as Y* の表現形式に注目し、それらが用いられる場面・文脈・状況を意識して考察を行う。

言語理解・運用に係る場面・文脈・状況の問題は、発話による意味の伝え合いを考えるうえで重要なテーマである¹。「比較」に係る意味の伝え合いを考えるうえで、意味論的な見方を補うべく、プラグマティックな視点を重視しながら、以下、覚書的に記す。

構成は次の通りである。

- I. 比較表現に係る文法上の誤用
 - II. 比較表現とその場面・文脈・状況把握に関する考察
 - III. 古典落語「子ほめ」に見られる比較表現と語りの考察
 - 1. 対話の活用に係る考察
 - 2. 考察からの余滴
- おわりに

I. 比較表現に係る文法上の誤用

外部試験の問題を手がかりに比較表現に関する受検者の理解の状況を検討してみる。下記の例題にみられるように、各下線部に最適の比較表現を選択肢から選んで補い、全体として意味の通る文章とする問題である²。大学初年次生およそ2000名が受検した外部試験の結果を参考に、比較表現に係る二つの例題をみてみよう。いずれも正答率が半分に満たなかったものである。

¹ 同様の見方は、最近の言語教育の論調にも見られる、たとえば、中森（2018:192）では「買い物や旅行、郵便局や銀行といった場面、時間や空間といった概念、丁寧さを求められる文脈、初対面の来訪者を接客する状況といった、言語運用の側面を精緻に観察、記述、説明する基礎研究が、コミュニケーションのための言語教育では求められている。」という。なお本稿での、場面・文脈・状況という表現は、厳密に定義できているわけではないが、英語でいう *situation* や *context*、あるいは *context of situation* 等の語（句）に相当する。

² 例題その1と2について、文法力を測るための作問上の文法的観点は残しつつ、問題文を改変している。なお、本稿の例題は2009年度鹿児島大学教育センター外国語教育推進部（当時）での誤用分析（文法問題担当：富岡龍明氏と筆者）を出発点とし、さらにそれを深めたものである。

比較表現に関する例題その1

Taro was born on March 21st, while Jiro was born on February 20th of the same year. That means that Jiro _____ Taro.

[選択肢：1) is older than 2) is as old as 3) has been old as 4) has older age than]

例題1の正解は、1)の *is older than* であるが、誤答率が高かったのは、2)の *is as old as* であった。この問題は、全体の正答率(46%)よりも、下位学生の誤答率が高かった(56%)。上位学生でも4割近くの学生に誤用が見受けられた(38%)³。全国レベルの統計でも、ほぼ同じ傾向がみられた(正答率：51%、下位51%、上位37%の学生が原級比較 *as old as* を誤って選択)。原級比較を誤って選んだ背景には何があるのか。一つには、日本人学生の場合、英語の *old* は、*He is ten years old* (彼は10歳だ)のような表現に見られるように、年単位で概念でとらえている可能性が高いと思われる。それがこの問題に関しての誤答 *as old as* を選んでしまった要因と考えられる。

この問題文は、対話形式となっていないが、二人の人物の、それぞれ異なる誕生日が具体的に語られ(2月20日と3月21日)、二人とも同じ年に生まれているという文脈、場面である。12か月に基づく暦の概念が発話の前提としてあり、暦は *February* が *March* よりも早く廻ってくることが分かっている必要がある。仮に、この二人の長幼の差について、*How much older is Jiro than Taro?* と訊ねられれば、*Jiro is one month older than Taro (is).* とか *Jiro is older than Taro by one month.* と答えることとなろう。このように *old* と共起しうる時間の単位表現は *year* の他に *month* をはじめ、*day*, *hour* という単位も念頭に浮かぶが、実際、*British National Corpus* から、次のような類例が挙げられる。

- a. When I was fourteen months old, my mother was arrested.
- b. The baby was only three weeks old and Jeanne was still very tired.
- c. She had her first operation when she was 21 days old and has never experienced the life of a healthy child.
- d. Her daughter Alexandra was just 36 hours old when she was taken from St. Thomas's Hospital.

ここでは、人物に関する *age* (年齢) の概念が場面・文脈・状況によって、*year* (cf. 年齢) のみならず *month* (cf. 月齢) の他、*week* (cf. 週齢)、*day* (cf. 日齢)、*hour* の単位にまで拡がりをもつことを確認できればよいであろうが、例示した各例文には、当然のことながら場面・文脈・状況があって、それらを踏まえての表現であることには注意が必要と思われる。それぞれが固有の場面・文脈・状況をもった1文のみの表現でしかないが、たとえば、接続詞(複文、重文、混文)の種類、節の配置とその順序、副詞の有無、語彙の選択から、それぞれの場面・文脈・状況について推察的に汲み取れる情報は少なくない。この点について、比較に係る例題の考察から多少はズれるが、ここで概観しておこう。

上記の例示英文 a であれば、「自分が生後14か月のときに母親が捕らえられた」という意味を伝えているが、物心両面の支えが必要な乳幼児期に母子関係の断絶が示されている。情報構造上は、従属節と主節の関係から、主節で述べられている母親の逮捕のほうに焦点がある。

例示英文 b であれば、「(当時)子どもは生後3週間でしかなく、(母親の可能性が高い) Jeanne はいまだにひどく疲れていた」と取れる。前半と後半の情報は、等位接続詞 *and* で並置さ

³ 統計データは当該試験の成績結果をもとに、上位、下位の各27%ずつの集団を統計の便宜上、それぞれ上位グループ、下位グループとしている。誤用に係る統計基礎データは英語教育改善策の一環として G-TELP 日本事務局により作製・提供いただいたものである。記して謝意を表する。

れている。二つの節内の情報の重さに極端な偏りはない。過去のある時点での満足のいかないうちが見て取れる。

例示英文 c は、「彼女は最初の手術を経験したが、それは生後21日目であり、(それ以来、今に至るまで) 健康な子供が持っている命を経験することが全くない」と受け取れる。過去の手術以後、今日までの状況を従属接続詞 *when* と等位接続詞 *and* を用い、文全体としては、重文や複文よりも複雑な「混文」で細かく伝えている。重い内容である。

例示英文 d は、「彼女の娘 Alexandra はちょうど生後36時間であったが、その時に聖トマス病院から連れてこられた。この文は、従属接続詞 *when* を用いながらも、他の a や c と対照的に、従属節でなく主節に生後の時間が示されており、副詞 *just* とともに病院からの移動が生後わずか36時間だった点が強調されている。

さて、例題その1の考察へ戻ろう。もう一つには、選択肢 2) に見られる X as ... as Y の表現形式が持つ本来の意味と用法である。同い年という場合には、通例、Taro and Jiro are the same age. や (Jiro を視点に据えれば,) Jiro is the same age as Taro's. となろう。X as ... as Y という表現形式は、as に挟まれた語(句)の...という性質に関して、「Xが少なくともYと同程度(or 同程度か、恐らく、それ以上)」であることを示す⁴。つまり、その性質に関する程度は、XのほうがYよりも大きいという含みや可能性があるということである。

Jiro is as old as Taro. という発話は、機能上、単に次郎と太郎は同い年だという意味の伝達にあるのではなく、たとえばその前段に、Jiro が何かしら不利な立場に立たされるような状況や評価があって、実際はそうではないのだという方向に持って行く際に典型的に起こるとい⁵。Taro の年齢を基準とすれば、Jiro もそれ相応の年齢に達して Jiro を過小評価してはいけないという含みがある。Jiro を擁護したり、彼のメンツを保つ必要があるような場面・文脈・状況が予想されるというわけである。問題文にあるような、同い年の二人の誕生日の情報のみが最初に示されているだけの文脈を受けて、X as ... as Y の形式を導入することは自然ではないということになる。この形式が自然である対話として、澤田(2018:52)は、次例を紹介している。

A: How tall is Mary?

B: She's as tall as Jane.

但し、この対話が自然に成り立つには、Jane の身長に関する知識が対話者同士の間で共有されていなければならないという(cf. 澤田2018:52)。そのような場面・文脈・状況がなければ不自然な対話になってしまうということである。この場合には、Mary の身長は Jane と同じくらいか、それ以上という解釈ができる。単純に、Jane と同じくらいだ、というのとは異なるわけである。このように、場面・文脈・状況への考慮がないと誤用してしまう点に注意が必要である。

関連する誤用の類例の、もう一つみておく。

比較表現に関する例題その2

Taro always gets better grades than his brother, Jiro. Although Jiro is _____ Taro, he is not as good at taking tests.

[選択肢: 1) as brighter than 2) brighter as 3) more brighter than 4) as bright as]

⁴ Huddleston and Pullum (2002:1100-1101) や Larsen-Freeman and Celce-Murcia (2016³:782-783)、八木 (1987:122-124) を参照。さらに澤田 (2018:52-53) や田島 (2018:75-77) ならびに Larsen-Freeman and Celce-Murcia (2016³:786) では、この比較表現に関する英語学の知見の英語授業への応用や教育上のヒントについて言及している。

⁵ たとえば、ミントン (2004:35-39) を参照。

正解は、4) の *as bright as* であるが、誤答率が高かったのは、3) の *more brighter than* (全体 43%、下位 53%、上位 25%) である。この問題も全体の正答率 (44%) よりも下位グループの誤答率 (53%) のほうが高い。上位グループでもその 25% が的をはずした。ここでは、比較の意味というより比較の表現形式に関する戸惑いが見られる。*bright* の比較級が *brighter* であり、主語と時制のありようによって *bright* の前の *be* 動詞が変化するという理解の下、これを用いた比較の形式が基本的に *be brighter than* ~ であることが把握できていれば、消去法からでも選択肢の 1), 2), 3) が省かれ 4) が残ることになる。

冒頭に示された場面・文脈・状況として、Taro はその兄弟の Jiro と比べて、(試験の) 点数がいつもよいという。それを受けた 2 文目は、接続詞 *though* を用いた譲歩による従属節に導かれ、主節は、彼 (次郎) は (太郎と比べて)、試験を受けるのがうまくない、と続く。問題文中の *taking tests* の後には、*as Taro is* が省略されていると考えられる。次郎も太郎も試験を受けるのはうまいが、それでも次郎は太郎ほどはうまくないと読める。先の前段をうけて、2 文目で仮に *Though Jiro is brighter than Taro.* と表現できれば、次郎が太郎よりも聡明であるが、と譲歩の中で言い切ってから、試験というものを受けること自体の得手・不得手につなげることは可能であろうか。可能だとしても *brightness* についての差をあからさまに表現することの不自然さは残るであろう。それを言い切るにはそれなりの場面・文脈・状況や根拠が必要であろう。また、通常の場面では Jiro に対して失礼であると考えられ、日常生活の面では表現することはためられる。他方、試験の得点がいつも芳しくないという文脈に続けて、「譲歩」が現れるという流れを踏まえれば、「次郎は太郎同様に聡明ではあるが」とするのが最も自然な意味の流れともいえる。次郎を慰め、励ます場面ともいえる。

以上の二つの例題とその受検結果は、教育的視点からは、英語の *old* は必ずしも年単位の意味が固有にあるわけではないこと、加えて、通常の比較級表現形式の *X -er than Y* や原級比較による表現形式 *X as ... as Y* の場面・文脈・状況を考慮したプラグマティックな意味について、学生に考えさせ、気づかせる機会になりうると思われる。

次に、原級と比較級による比較表現について考察してみよう。例題 1 では比較級による *X -er than Y* の表現形式を使うべきところを、原級比較による表現形式 *X as ... as Y* を使い、他方、例題 2 では、*X as ... as Y* 形式を使うべきところ、*X -er than Y* 形式を使おうとする傾向が見て取れる。比較に係るこれら二つの形式の違いに対応する用法の理解が不十分で、混乱を起していると考えられる。とりわけ場面・文脈・状況を踏まえたプラグマティックな意味を確認しておく必要がある。プラグマティックな意味というとき、そこには論理的な意味とともに場面・文脈・状況に起因する心理的な意味が込められることが多い。それは、言語を目的に応じて主体的に活用しようとする人間が創り出す営みであるからと考えられる。

II. 比較表現とその場面・文脈・状況把握に関する考察

ここで別の異なる場面・文脈・状況について、叙述形式のものと対話形式のものを若干とりあげる。まずは、日本の女子教育の先駆者、津田梅子 (1864-1929) の見た日本の明治期における男女間の社会的地位に係る比較表現をみてみよう。

Most women in Japan did not have jobs back in those days, and they got married at a young age. Umeko's parents wanted her to marry, so they made her meet many men. But in the end, she chose not M, to marry. She wanted to work to help improve the lives of women in Japan. She thought, "Women in Japan think that they are less important than men. They are not thinking about changing society."

Umeko wanted to teach women that they could be important in both society and at home. She felt

that the first step was to help women understand that they were just as important as men. To do this, she thought they had to get a good education.

(斉藤&渡辺2018: 99; 引用中の下線は筆者による—以下同様)

上記の最初の下線を付した文の前段部では、明治期の女性の社会的地位に対する梅子の疑問が、主体的とはいえない当時の結婚のあり方を例に述べられる。それを受けて、梅子は、当時の日本女性は自尊心が低いと考えているとみた、と紹介されている。二つ目の下線については、その前段で、社会と家庭における女性の重要性を女性に教えたいとの梅子の思いを紹介している。それを受けて、女性に理解してもらいたい内容を表現するのに、第二の下線部の比較表現が用いられている。ここでも、女性が男性とまさに等しく重要であるという点に力点があるわけではない。すでに重要であると認識されている男性と比較することで、女性がいかに重要な存在であるのかを強調するところに、この X as ... as Y 形式が用いられた意図があるとみてよい。男性と同等の女性の重要性というものを過小評価してはならない、という含みをしっかり汲み取ることが肝要である。

さらに、同じ比較形式による表現効果をめぐって、中学・高等学校等の英語教科書にみられる対話における別の場面・文脈・状況について考察しておこう。

対話その1

ポールと久美と一緒に、ヒートアイランド現象に関する調査・研究の結果を発表する場面：

Kumi: Paul and I studied about heat islands and green roofs.

Paul: We learned that plants cool buildings. Look at this. The surface of a regular roof is over 50 degrees. It's as hot as sand on a summer beach.

Kumi: A green roof is better than a regular roof. The green roof is only 30 degrees. Growing plants on roofs may be the best way to fight heat islands.

Paul & Kumi: Thank you. (New Crown 2, 三省堂, 2005, p.65)

建物の通常の屋根と夏の海辺の砂の比較である。下線部の表現は、単純な比較ではなく、暑さの強調として機能している。同じくらい、いやそれ以上、という含みがある⁶。

対話その2

厳密には対話形式ではないが、A が何らかの手伝いの依頼を受けたが、手伝いを引き受けることが難しく、自分の代わりに George に手伝いの依頼をしてはどうかと依頼者に提案する場面：

A: Why don't you ask George? He is not as busy as I am.

(Daily English course I, 池田書店, 2009, p.76)

⁶ 対話ではないが、同様の強調効果と考えられる以下の類例がある。A子が合唱コンクールについてスピーチをする場面：

I'm going to tell you about the chorus contest. Look at the photo on the screen. My parents took this photo. Every year we hold this contest in November. It's as exciting as Field Day. All the classes practice very hard for it. I didn't like singing, but this year I practiced very hard with my classmates every morning. Finally, we won first prize. We were all excited. Now, I really like singing with my friends. (Sunshine 2, 開隆堂, 2006, p.68)

下線部は合唱コンテストと Field Day (運動会) の原級比較であるが、すでに exciting であると分かっている Field Day と比べることで、コンテストがいかに exciting であるかを伝えている。単純に両者の exciting が表す程度が同じくらいであることを示しているのではない。

他の特定の人物と自分との原級比較である。George も自分も、共に忙しいことに変わりはないが、George は自分ほど忙しくないと述べ、私ではなく George に頼んではどうかとの思いを、依頼者に対して間接的に伝えるメッセージとなっている。

対話その3

ケンが留学先のホストファミリーでの夕食時に、その家庭の父親 (Paul) と会話をしている場面：

Paul: Do you often eat rice in Japan?

Ken: Yes, we eat rice almost every day.

P: Do you eat spicy food, too?

K: Yes, we sometimes eat spicy stuff, such as curry rice or Korean food. But I am not so keen on spicy food myself.

P: In England, people like Indian food a lot. There is a really good Indian restaurant, called Devana just around the corner. The Indian food in this country is not as hot as authentic Indian food.

Don't worry. You will love it.

(*Primer for English Writing*, 南雲堂, 2005, p.11)

下線部はイギリスの地元カレーと本場インドのカレーの原級比較である。両方とも辛い、イギリスの当該のレストランのカレーは本場インドほどではない、という意味を伝え、辛いものをさほど好まないという Ken への配慮がにじむ。異国での食に関して、余計な心配の種を与えないという心遣いでもある。仮に、The Indian food in this country is as hot as authentic Indian food. であれば、既に辛いとわかっている本場インドカレーと同様に、イギリスのカレーは辛いのだと強調することとなり、文脈上、辛いのはあまり好きではないと既に発言している Ken には大きな心配となる。また仮に、The Indian food in this country is no hotter than authentic Indian food. であれば、本場と比べて当該の店のカレーは全く辛いことを強調することとなる。その場合の X no -er than Y という表現形式は、X as ... as Y の形式と反対の機能をもつとみてよい。さらに、The Indian food in this country is not as hot as it seems. や ~ is not as hot as I thought. であれば、当該のカレーは、自らの観念や予想を基準にして、思っていたほど辛くはないと述べることとなる。

III. 古典落語「子ほめ」に見られる比較表現と語りの考察

冒頭で、太郎と次郎の年齢や長幼の差にまつわる問題をとりあげたが、最後に、具体的な文脈、場面、状況があつてことばが機能すると言う観点から、*old* という形容詞を用いた年齢表現が比較的多様に取り上げられ、言葉遊びから、日常の言語運用の性質を考えるヒントを得るに資すると思われる例として、“The Praising Game” と題する retold 版の創作対話 (斎藤 & 渡辺2018に所収) を考察してみたい。これは「子ほめ」と題する古典落語のひとつである。

本来であれば、detail があつての落ちの醍醐味を楽しみながら検討するのが筋であるが、本稿では、落ちの要諦ははずさずに簡約英語により話の大筋を伝える英文をとり扱う。簡約英語は言語表現上の全体構成も簡約されることにつながるが、それはかえって要点や本質を浮き立たせ、鮮明化するように思われる。簡約英語による英文は、場面・文脈・状況を念頭におきながら文法事項を教育、学習する教材としても適しているのではなかろうか。

対話者は弥太郎と老人の二人で、数箇所、ナレーションが挿入される。笑いを誘う話という観点から表現の構成をみると、短いながらも3部に分かれており、ナレーションが場面導入の節目となっている。

場面1：「状況」の説明と老人からの指南を受ける弥太郎。

場面2：町に繰り出し、男と対話。

場面3：子どもの生まれた友人の家を訪れ、友人の父親、妻、飼い犬を子どもと見間違え、拳句の果てに、生後6週間の赤子の齢を5週間さばを読み、生後1週間と見えるとして、その「若さ」を称えるところを「落ち」として終わる。

上等の酒を他人からご馳走してもらう方法を或る老人に指南してもらうが、その方法は、他人から酒を施してもらう目的で、相手の実年齢を訊き出し、その年齢の割りには若く見えると伝え、相手をおだてほめるといものである。立ち止まって、何が笑いを生み出しているのかを考察してみよう。笑い話と受け止めるためには、言語表現上の知識だけでは不十分で、文脈、場面、状況を踏まえた言語運用上の知識、あるいは経験が必要であることをみていきたい。一連の話ではあるが、便宜上、ところどころ区切る。

Narration: One day, Yataro goes to ask an old man for advice.

Yataro: Hey, old man, I don't have much money, but I want to drink good sake. What Should I do?

Old Man: Well, if you say something nice to people, they might give you sake for free.

Yataro: Oh, really?! But what should I say?

Old Man: When you meet someone, ask him how old he is. Then, tell him he looks five years younger than his real age.

Yataro: Okay...

Old Man If he is 50 years old, tell him that he looks like he is only 45. If he is 55, tell him he looks like he is only 50. (斎藤&渡辺2018：77)

この対話の冒頭部分で、弥太郎は、ただで酒を飲むにはどうすべきか、或る老人から指南を受ける。相手の心に喜ばしいこと (something nice) を伝えればよいと教える。たとえば、相手の年齢が50なら45にしか見えない、55なら50にしか見えないというように、見た目よりも5歳若いと言えという。(後に、この老人からの助言を弥太郎が額面通りに受け取る滑稽さが描かれる。) こうした指南を受けながら、弥太郎は老人に次のように問う。

Yataro: Wait ... But what happens if he's 150 years old?

Old Man: Nobody is 150 years old!

Yataro: Oh, yeah... Then, what should I do if I see a child?

Old Man: Children will not give you sake, so you should tell the parent something nice about the child.

Yataro: Okay, What should I say?

Old Man: Something like this: "Oh! Your son looks just like his handsome father!"

Yataro: Ah, I see. I will try it. Thank you!

Narration: With that, Yataro goes to town. (Ibid.: 77-78)

相手が150歳のときはどうなるか、また、相手が子どものときはどうするか、という弥太郎からの問いである。前者の問いに対して老人は、そんな高齢者はいないと一蹴し、後者の問いには、子どもが酒を振舞うことはないことわりながらも、その子の親に耳さわりのよいこと、たとえば、その子は器量の良い父親にそっくりだ、といった褒めことばを指南する。こうしたやり取りを経て、弥太郎は町へ繰り出す。

- Yataro: Hey, there's a man. I will tell him he looks young, and he will give me some good sake! (*To the man*) Hello!
- Man: Yes?
- Yataro: How old are you, sir?
- Man: I'm 40 years old.
- Yataro: Uh, 40? (Talking in his head) Oh, no!
I forgot to ask about people that are younger than 50! (*To the man*) Excuse me, can you say that you are 50 years old?
- Man: Huh?! What are you saying? You are a strange man.
- Yataro: Please, sir?
- Man: Okay ... I'm 50 years old.
- Yataro: You are 50? You look so young! You look like you are only 45!
- Man: What?! I am only 40! Humph (*Hits Yataro*)
- Yataro: Ouch! Oh, no... I didn't do it right. Oh, I just remembered! My friend has a child. I can say nice things about the child, and he will give me sake.
- Narration: With that, Yataro goes to his friend's house. (Ibid.: 78-80)

町で出会った男性の年齢が40だと聞いて、弥太郎は、相手が40であった場合に褒めことばとなる年齢を先の老人から聞きそびれていたことを嘆く。老人の助言を額面通りにしか受け取っていない。そこで相手に、実年齢とは無関係に自らの年齢が50だと言わせ、45にしか見えないと伝えて、実年齢が40の相手から大目玉を喰らう。

ここでは、初対面の人物に年齢をたずねることの無礼は問題とされていない。自分の都合を優先させて、相手に弥太郎の都合のよい年齢を言わせるというこっけいなやり取りである。相手もそれに乗って、弥太郎の言うとおりに、語り手は演じさせる（笑いを作るという前提があることから、聞く側も、そうしたお膳立てを許容している。）笑いの設定が施され、「全知の語り」の助けを借りながら、こっけいなやりとりを楽しむ、言葉遊びの境地が見て取れる。弥太郎は気を持ち直して、子どもがいる、弥太郎の友人宅に赴くと、暖かく迎えてくれる。話の最終部である。

- Friend: Welcome, Yataro. Please come inside.
- Yataro: Thank you. (Goes inside) Oh, is this your son? He is so big! And he has white hair!
- Friend: No! That is my father! My son is sleeping over there.
- Yataro: Oops. Oh, I see him now. Aww, he is so cute. He looks just like your wife!
- Friend: That is my dog. My son is behind the dog.
- Yataro: Oops. Oh! Your son looks just like you. He is not good-looking at all!
- Friend: What?! Don't talk about my son like that!
- Yataro: But I said your son looks like you. That was nice, right? Now, can you give me some of your good sake?
- Friend: No! You are making me angry.
- Yataro: Okay, then. Let me try again. So how old is your son?
- Friend: He is six weeks old.
- Yataro: Six weeks old?! He looks so young!
- Friend: What are you talking about? How old does he look?
- Yataro: Umm... One week old? (Ibid.: 80-81)

友人の子ども（息子）を話題として切り出し、その親である友人に褒めことばを語り、酒を振舞って貰う魂胆であったが、笑いの仕掛けがその前段にもある。子どもが描写されるという場面で、（子どもは）身なりが大きくて白髪か、と訊ねると、それは友人の父親であった。次に、かわいらしくて、奥さんのようだと言われ、それは友人の飼い犬であった。話しの焦点となるこの友人の息子に対して、最後に、友人と瓜二つで不細工だと告げると、友人からは当然、息子を悪く言うなとたしなめられる。しかし、そこで弥太郎は、（友人と）そっくりなのだから何も悪くならぬと居直る。友人を怒らせた後、最後に息子の歳を話題にする。生後6週間だと聞かされ、若いねとコメントする。「何を言ってる、いくつに見えるのか」と友人に尋ねられ、実年齢よりも5歳若く見えると答えよ、という老人からの教えを念頭におきながら、このときは多少の応用を利かせて、その息子の齢に5週さばを読んで、生後一週間にみえるところとした。

こうしたコメントが本来の創作対話の笑いを興ざめとし、野暮になると思いつつも記したのは、この対話例は、単に英語の年齢表現に係る形容詞 *old* の振る舞いを確認するためのものだけでなく、プラグマティックスの面から、重要な、場面、文脈、状況といった日常の言語使用に係る現実を考察する糸口ともなると考えたからである。

1. 対話の活用に係る考察

弥太郎が街で出会う人から酒をご馳走してもらおう方略は、相手の歳が実際よりも5歳若くみえることを伝えて相手との友好関係を築こうとするものであったが、要約版ということもあって、対話に十分な臨場感は望みにくい。そこで、唐突な発話と感じられるような箇所と比較的自然な臨場感を与えるには、どのような表現の工夫ができるであろうか。先の原級比較や比較級の表現を用いて考察してみよう。こうしたテーマは、教場でも比較表現学習の一場面ともなるのではないか。

先の「子ほめ」の対話の中で、町での弥太郎の声かけの場面を再掲する。唐突さを薄めるべく *How old are you, sir?* の前に比較を使った3つの表現を置き比べてみよう。

Yataro: Hey, there's a man. I will tell him he looks young, and he will give me some good sake! (*To the man*) Hello!

Man: Yes?

Yataro: a) You look quite a bit younger than me. How old are you, sir?

b) ⁷You don't look older than me. How old are you, sir?

c) You don't look as old as me. How old are you, sir?

Man: I'm 40 years old.

(斎藤&渡辺2018: 79; a), b), c) の各例文は筆者挿入)

元テキストに見られる年齢に係る比較表現は、老人からの指南を受けて、5歳のさばを読む比較基準は、たとえば本人が50歳なら45歳に見える、という具合に、本人の実年齢であった。上記再掲の対話にある弥太郎の二つ目のセリフに記した a, b, c の比較表現について、考えてみよう。この考察では、弥太郎の年齢相を基準にして、相手がそれよりも若く見える、という趣旨の比較表現を並べてみた。唐突に相手の年齢を尋ねるのではなく、その質問の前に、もうひとこと言うならば、どれも可能であろうか。

a) は、相手の年齢相について弥太郎を基準に *young* を用いた比較構文であるが、年齢差の印象を強調するため *quite a bit* という副詞句を添えた⁷。年齢に違いがかなりあると見えるからこそ、

⁷ これは John Nevara 氏 (personal communication) からの informant 情報に基づく。また b) の適切さについては、対応する日本語訳 b') と同様に不自然であり、c) は可とのこと。加えて、比較基準を表す *than* 以下の表現に関して、対話では *~ than I (am)* よりも *~ than me* が一般的である由。情報提供に謝意を表す。

わざわざ年齢を尋ねるのである。

b) は、相手の年齢相について弥太郎を基準に *old* を用いて否定する比較構文であるが、わざわざ *old* を用いてそれを否定するところに違和感が感じられる。ミントン (2004: 52-53) を応用的に参考にすれば、b) は、たとえば相手 (Man) が弥太郎との年の差を話題としたとき、相手の方が歳が上であると弥太郎に告げるような場面・文脈・状況において、今度は弥太郎の側から、いやいや、そうではありませんよ、(やはり) あなたは私より歳が上ではありません、と反論するようなセリフと考えられる。よって、相手とのやり取りの後に反論をするような文脈で用いられてはいない b) は、この文脈では不自然となるのであろう。

c) は、原級比較を用いた同等比較構文であるが、機能上、もしくは意味上は、*You are older than me.* の否定文と考えられる (cf. ミントン2004: 72)。あなたは私ほど年をとってはいません、私よりも若いです、ということである。

a), b), c) の英文に相当する下記のような日本語表現 a'), b'), c') を考えてみると、先のような特定の場面・文脈・状況における3つの表現の趣旨は同じでも、やはり英語と同様に、下の a') と b') に比して、b') には違和感が感じられる。

a) お見掛けするに、私よりずいぶんお若いですね。お歳はお幾つですか。

b) お見掛けするに、お歳は私より上ではありませんね。お歳はお幾つですか。

c) お見掛けするに、お歳は私ほどとられてはいませんね。お歳はお幾つですか。

従って、先の場面・文脈・状況において、唐突に相手に年齢を尋ねることなく、ワンクッションおいて尋ねるには、三つの表現のうち、b) を除き、a) か c) の表現がよいだろう、ということとなる。

また、相手が40歳だと返答した後の流れを、少し変えて想像することも可能であろう。

たとえば、弥太郎が機転を利かせて、相手が40歳であることから、指南を受けた方略通り、5歳サバを読んで35歳に見える、と伝える場面を想像してみる。そのような場面では、弥太郎のセリフは次のようになろう。

Yataro: You are 40? You look so young! (あるいは、You look younger than your real age.) You look like you are only 35!

しかし、この先の展開として、思惑通り、この男から酒をふるまってもらえるかどうかは分からない。教室では、展開の可能性を考えて複数のパターンを自由に創作してみるという活動にもつなげられるかもしれない。

教育活動という観点からは、たとえば少なくとも次の三つのテーマが立ちうるであろう。

- 1) テキストから比較表現が用いられている箇所をすべて抜き書きしてみる。どういう性質について、何と何とが比較されているのか、場面・文脈・状況も踏まえてあらためて深く考える。
- 2) 最初に出会う男性とのやり取り場面で、いきなり相手に年齢を尋ねることの唐突さをわずかでも回避する手段として、比較表現を利用した声掛けの方法を考える。

⁸ その際、比較という心的な作用 (psychological process) についてより深い考察が得られるのではなかろうか。この点については Sapir (1944) を参照されたい。この文献がさまざま教育現場において利用できるわけではないが、比較に係る人間の認識や比較表現に関する本質的な議論をするには教育上、参考となる論考と思われる。詳細は割愛するが、その考察の特徴は、論理と心理の両面を踏まえてから言語的な grading を掴もうとする手法にある。従っておのずと考察の過程で、比較という心的事象に深く絡む話者の感情や情意の問題も浮上する。

3) 最初に出会う男性とのやり取り場面で、実年齢を聞いた後、方略通りに対話を進める場合のシナリオを創造的に作成してみる。

2. 考察からの余滴

「子ほめ」における言語使用は、大枠が笑いを前提として始まっている。そこでは、言葉遊びが許容される世界であって、小説と同様に言語による虚構の場である。日常の言語運用に係る礼儀作法やルールは二の次となっている。逆にそのルールをあえて破るところに笑いを生む原点がある。

Grice (1975:46) は協調の原理 (cooperative principles) のもと、現実世界の日常の会話に係る4つの公理 (もしくは格率; maxims) を示したが、先の褒め遊びの話はそれらに部分的に反するところに新しい意味を創り出し、笑いや滑稽な言葉遊びに転化されている。

Grice の4つの公理とは、およそ次の通りである。

公理1、Quantity (量) の観点から：情報量は適切であれ。

公理2、Quality (質) の観点から：真実であると信じる事柄を伝えよ。

公理3、Relation (関係) の観点から：関連のあることについて語れ。

公理4、Manner (様態) の観点から：曖昧を避け明瞭に簡潔に語れ。

日常の現実世界でも、意図の有無に関わらず、これらの公理が必ずしも十全には守られていないと思われるが、会話というものを支える条件を考える大枠としては妥当であろう。これらの観点から、先の褒め遊びの対話を敢えてみる。

情報量の面からは、創作だけに無駄がない。必要最小限のやり取りの中に笑いのツボを宿らせている。情報量に大きなアンバランスは見られない。

質の面からは、守られていない。相手に偽りの年齢を言わせる場面までである。相手もそれに乗って偽りの年齢を言うところにも日常のやり取りを逸脱した笑いがある。他方、登場人物はすべて、自らが真実だと信じる事柄を真剣に相手に伝えてみるとみるからこそ、笑いが生まれるとも考えられる。

関連性の面からは、たとえば、やみくもに年齢をたずねることの違和感がある。実際の落語では、おそらく対話を起こす箇所、相手との気の利いた挨拶や四方山話も挟まれる余地があろう。前節で、落語の対話にみられた How old are you? という唐突な質問を避ける表現について3種の比較構文を用いて考察をしたところである。

様態の面からは、いわゆる「全知の語り」の効果もあって、簡潔明瞭で無駄がない。

会話の4つの公理に照らしてみると、概略ながら総じて、とりわけ質の面の違反が大きい。それはこの話が、真実は二の次として、人をおだて褒めることで便宜を得ようとする滑稽さをテーマとしているからであろう。言葉によって物語としての虚構を創りあげ、それを楽しめるところに人間らしさがあるともいえよう。

そもそも、誰かに上等な酒を振舞ってほしいと願う弥太郎は、直接それをことばで伝えようとはしない。相手を何らかの理由で賞賛し、良い気分になってもらうことで、その見返りを望む思いがある。相手が弥太郎から褒めてもらえたお返しに酒を振舞う、という結びつきには必然性はないが、そうしたこともあるかもしれないという方向の理解のもとで、お膳立てが組まれている。

さて、ある程度の年齢以上の成人がその「若さ」を称える傾向を、赤子にも当てはめて生後6週の子に対して生後1週に見えると言ひ、親をおだてて酒を振舞ってもらおうとする弥太郎の滑稽さは、異文化理解のテーマにもなりうるであろうか。こうした落語の場面・文脈・状況の設定に、日本的な見方、考え方を反映する文化的な特徴がどの程度あるのでしょうか、異文化からの

視点では、どう受け止められるのか、ここでは未知数である。他方、年齢を諸経験とともに積み重ねてきたことに対する価値観も場面・文脈・状況によって多様に考察できるであろう。異文化からの視点を導入することで、異文化を貫く共通的な心理的特徴や、日本の価値観や考え方に見られる日本らしさを、あらためて考える糸口ともなるのではないか。

おわりに

本稿は、英語の比較表現に係る問題に対する大学初年次生の誤答を手がかりに、主として年齢表現に係る英語形容詞 *old* の用法といわゆる比較級構文 *X -er than Y* と原級比較と呼ばれる *X as ... as Y* の表現形式について、それが用いられる場面・文脈・状況を意識して若干の考察、確認を行った。

本稿の3節で触れた古典落語「子ほめ」のテキストについては、年齢表現の幅をみるだけでなく、場面・文脈・状況との関係で、比較表現のもつ微妙な意味について教室でも共に考えることを想定して、考察を試みた。さらに場面・文脈・状況を踏まえた語りの構成や、話の文化的背景、文化による笑いの受け止め方の違いといった異文化理解の面からも考える余地のあることに触れた。

必ずしも比較表現に限ったことではないが、広く意味の伝え合いに係る言語の理解、運用の両面で、適宜、言語学、言語教育学等の知見を援用しつつ、論理面、心理面に目を向け、場面・文脈・状況をおさえながら、教育・学習方法のあり方をさらに考えていきたい。

参考文献

- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." *Syntax and Semantics, Vol. 3, Speech Acts*, ed. by P. Cole and J. L. Morgan, pp. 41-58, Academic Press, New York.
- Huddleston, R. D. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Larsen-Freeman, D. and M. Celce-Murcia. (2016³) *The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Language Teachers*. National Geographic Learning & Heinle Cengage Learning, Boston.
- ミントン, T. D. (水嶋いづみ訳) (2004) 『ここがおかしい日本人の英文法 III』 研究社, 東京.
- Sapir, E. (1944) "Grading: A Study in Semantics," *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*, ed. by D. Mandelbaum, pp. 122-149, University of California Press, California.
- 澤田治美 2018. 「意味論・語用論を活かした英語の授業— "x as...as y" 構文の意味解釈をめぐって—」 池内正幸・窪藺晴夫・小菅和也 (編) 『英語学を英語授業に活かす—市河賞の精神を受け継いで—』 pp. 35-54, 開拓社, 東京.
- 田島久士 2018. 「語研研究グループと英語学の知見—これまでの研究から—」 池内正幸・窪藺晴夫・小菅和也 (編) 『英語学を英語授業に活かす—市河賞の精神を受け継いで—』 pp. 70-83, 開拓社, 東京.
- 中森誉之 2018. 『技能を統合した英語学習のすすめ—小学校・中学校・高等学校での工夫と留意』, ひつじ書房, 東京.
- 八木孝夫 1987. 『程度表現と比較構造』 (新英文法選書7), 大修館, 東京.

用例の出典

斎藤栄作・渡辺ロイ 2018. 『エンジョイ・シンプル・イングリッシュ』 3月号, NHK 出版, 東京. (その他、検定済の中学、高等学校英語教科書ならびに大学共通教育課程で使用された英語テキストについては、いずれも本文中に明記)

コーパス

The British National Corpus Online, World Edition. 小学館ネットコーパス.

Abstract

English Comparative Expression in the Context of Situation and its Teaching:
Pedagogical Implications for Grammatical Errors

Gen'ichiro Takahashi

Keywords:

comparative expression, context of situation, English teaching, grammatical errors, pragmatics

These notes and discussion are primarily concerned with English comparative and equative constructions such as in the following two discourse fragments : 1) Taro was born on March 21th, while Jiro was born on February 20th of the same year. That means Jiro is older than Taro rather than * Jiro is as old as Taro. 2) Taro always gets better grades than his brother, Jiro. Although Jiro is as bright as Taro (cf. Jiro is brighter than Taro), he is not as good at taking tests. Judging from the results of the test using the two discourse fragments above, some first year college students seem to be confused with the difference in meaning of the two types of constructions: "X -er than Y" and "X as ... as Y." Researchers have elucidated equatives do not merely indicate strict identity between the two entities (X and Y), but convey a meaning of the same or more (cf. not "exactly equal" but "at least equal"). In order to better understand the subtlety of meaning regarding the context of particular situations, excerpts from narrative passages and dialogues are provided. Also, the practical use of similar expressions will be demonstrated by using a scene from the classic story called "The Praising Game".